校内研究通信

守 破 離

NO.1

通信タイトルの意図:1 年次では、研究の基盤となる認知スキーマや学びの中動態といった概念、および教科固有の「見方・考え方」などを深く理解し、研究の基礎を築きます（「守」）。2 年次では、これらの学びを基盤としつつ、AI 時代における教育の課題に「破」る形で、新たな教育モデルを構築します。そして 3 年次では、これまでの研究成果を「離」れ、個別最適な学びを具現化する「『わたし』が生きる学校」という、本校独自の教育理念を確立します。

滋賀大学教育学部附属小学校の先生方へ

創立 150 周年を迎える今、私たちは、これまで築き上げてきた教育実践を基盤としつつ、AI 時代をたくましく生きる子供たちの成長を、滋賀大学教育学部との強固な連携のもと、この附属小学校の先生方と子供たちだからこそ実現できる、他に類を見ない新たな研究を創り上げたいと願っています。本研究は、教育目標である「心豊かで実行力のある子供」の育成を目指し、認知能力と非認知能力の相互作用を、具体的な授業実践を通して追究するものです。

先生方の教育への情熱と子供たち一人一人の可能性が織りなす学びの営みこそ、私たちが最も大切にしたいものです。予定調和的な授業展開ではなく、学びの中動態という概念を核に、滋賀大学教育学部の知見と附属小学校の実践を互いの強みを活かし、子供たちが主体的な学びを通して変容していくプロセスを、先生方と共に描き出していきたいと願っています。具体的には、認知能力と非認知能力を認知スキーマの観点から統合的に分析することを通して、動的な学習プロセスの中での子供たちの学びの本質を捉え、一人一人の成長を最大限に引き出す、この場所でしか生まれない授業を、共に創造していきましょう。

研究の成果は、2 年次に書籍としてまとめ、全国の教育現場に共有したいと考えています。子供たちの学びの軌跡、そして滋賀大学教育学部附属小学校の先生方と子供たちが共に歩んだ実践的な探究の過程が、未来の教育を切り拓く先駆的なモデルとなり、全国の教育現場に貢献できることを信じています。

子供たちの可能性を信じ、先生方と共に学び、研究を通して共に成長し、滋賀から全国へ、教育の未来を拓いていきたいと心から願っています。

新しい研究は、これまでの研究と何が違うの？　Q&A コーナー

Q: 今回の研究で用いる「鍵概念」と「教科独自のアプローチ」という言葉は、前研究における「教科固有の知識・技能を統合、包括する主要な概念」「知識・価値・創造物を深化させる教科ならではの方法」とどのように異なるのでしょうか？また、なぜ名称を変更したのでしょうか？

A:今回の研究で用いる「鍵概念」と「教科独自のアプローチ」は、前研究における「教科固有の知識・技能を統合、包括する主要な概念」「知識・価値・創造物を深化させる教科ならではの方法」という考え方を基盤としています。しかし、より研究の焦点を明確にするために、以下の点を中心に用語を再考し、名称を変更しました。

(1)名称変更の意図

表現の精緻化と意図の明確化: 前研究の用語は、その意味を正確に伝えるためにやや説明的になり、長くなる傾向がありました。今回の研究では、これらの用語を「鍵概念」「教科独自のアプローチ」という、より端的で意図が明確に伝わる言葉に置き換えることで、研究内容の理解を促進することを意図しました。

本研究の視点の明確化: 今回の研究では、認知スキーマの変化を媒介とした認知能力と非認知能力の統合的な発達を分析することが重要な視点となります。「鍵概念」「教科独自のアプローチ」という言葉は、この視点に立って再考されており、研究の焦点を明確にする役割も担っています。
(2)概念の再定義
鍵概念: 前研究の「教科固有の知識・技能を統合、包括する主要な概念」を、より学習者の認知構造との関連性を強調する言葉として「鍵概念」としました。これは、学習者が新たな知識や技能を習得する際に、既存の認知スキーマを変化させ、新たな認知スキーマを構築するための核となる概念を指します。
教科独自のアプローチ: 前研究の「知識・価値・創造物を深化させる教科ならではの方法」を、より教科の探究における学習活動の特性を明確にする言葉として「教科独自のアプローチ」としました。これは、学習者が教科の探究を通して、その教科特有の見方や考え方を習得するための学習活動や指導方法を指します。
(3)両用語の関係性
前研究と同様に、「鍵概念」と「教科独自のアプローチ」は、互いに密接に関連し合い、学習者の学びを促進する上で重要な役割を果たします。「鍵概念」は、学習内容を構造化し、認知スキーマの変化を促す核となり、「教科独自のアプローチ」は、学習者が主体的に探究を進めるための具体的な学習活動や方法となります。

Q:「学びの中動態」を取り入れることで、子供たちが好き勝手に学びを進めてしまい、当初の教科の目標から逸れてしまうのではないですか？
A: 「学びの中動態」は、子供たちの主体的な学びを重視する教育アプローチですが、決して子供たちを放置するものではありません。本研究では、認知心理学における「認知スキーマ」という概念を活用し、学習者の認知構造の変化を捉えながら、学びのプロセスを描きます。各教科には、子供たちが学ぶべき「鍵概念」と「教科独自のアプローチ」があります。教師は、子供たちがこれらの「鍵概念」を習得し、「教科独自のアプローチ」をする中で、認知スキーマを構築できるよう支援します。この「学びの中動態」において、子供たちの内発的動機づけは、学びを自発的、持続的に進めるためのエンジンとして重要な役割を果たします。子供たちが興味関心に基づいて学びを進める中で、教師は子供たちの学びの状況を把握し、必要に応じて助言や指導を行うことで、学びが目標から大きく逸れないようにします。

Q:新しい研究の限界や制約は何ですか？
A: どんな研究にも限界やカバーできない点があります。新しい研究では、次の２点がカバーできない、あるいは今後の検討が必要な点として挙げられます。１つ目は、（どんな教育実践にも言えることですが）教育実践が個々の子供たちの学びの文脈に依存する点です。モデルの一般化可能性には限界があるかもしれません。２つ目は、非認知能力の可視化の難しさです。認知能力の可視化に比べて、非認知能力は難易度が高いです。そこで本研究２年次では、以下の３つのアプローチで解決を試みようと計画しています。
(1)統合的なアプローチの重視
認知能力と非認知能力を明確に区別するのではなく、両者を統合的に捉え、「心豊かで実行力のある子供」の育成を目指します。
(2)認知スキーマ形成の重視
非認知能力の発揮を単に捉えようとするのではなく、認知スキーマ（個人の知識構造や経験に基づく精神的な枠組み）の形成に着目し、個人の主観や経験がどのように学習に影響するかを分析します。
(3)情報機器の活用
新たな情報機器を用いることで、子供たちの学びのプロセスを詳細に記録します。